

由良町の文化財

第 45 号 抜刷



和歌山県日高郡由良町教育委員会

と書かれている。他にも、菊池海荘が書いた襖3枚が残されている。八十一歳のもので、保定の印が分かる。

九、守応留守居日誌

留守居日誌とは、東京で邸宅を購入した守応が、家族で由良を離れた後の家の留守を任された、息子清麿（源太郎）の妻となる秀野（その頃養女）の祖父湯森久三郎（日高町志賀）の「日誌」である。

日誌は、明治六年七月〜明治十三年十二月まで書かれているもので、細かい毛筆で書かれていて、四三四枚（868頁）のものであり、古文書の解読に弱い小生の手に負えない。

幸い、故中西捷美先生、小出潔氏が少し解読された所もあるので、年表等で利用させて頂くつもりである。

表紙は次の写真の通りである。



式千五百三十三年第七月
明治六酉年也

日誌

湯森

十、二階建て乗合馬車（オムンボス）「千里軒」の絵

『明治二ユース事典第一巻』によると、明治七年八月六日の東京日日新聞に「千里軒」の二階造馬車として

「乗合馬車

弊社今般欧米各国にてもつばら行わるるオムンボスと称する二階造の馬車運転を始め、客三十人を乗せ浅草雷門前より新橋汽車ステーション迄一時に達す。

毎朝六時より午後八時迄一日往返六回すべし。路上の賓客便利のため途中の乗り下り望みに任す。ねがわくは四方の君子伏して来駕したまわん事を、

一人前賃金十銭途中半を限り三銭 千里軒」と載っている。

ところが、人気絶頂の二階建馬車も「往来のさわりを何と千里軒」で道が狭いため、事故が多く、わずか一ヶ月余りの九月九日付で、東京府知事大久保一翁より二階は取り崩せと達状が出ているのである。

そのため普通の馬車として残り、その後、明治十年から十三年頃まで、東京―宇都宮間を走らせたという。

①一階建て乗合馬車の錦絵

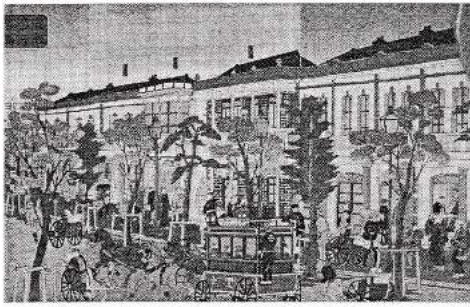
千里軒の乗合馬車の錦絵が（株）双葉社の『CG日本史シリーズ22明治と文明開化』に載っている。「錦絵で描かれた銀座」という事で、東京名所京橋銀座通

里練化石瓦斯燈景圖 とある。助手の脊中に紋様が見える。墓の紋と似ている。

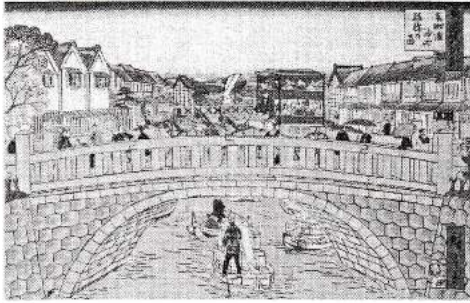
② 二階建て乗合馬車の錦絵

また、和歌山市立博物館所蔵の錦絵は、小出潔氏がカメラマン玉置実氏に撮影させて貰った写真が数枚あり、旧白崎中学校の「ふるさと資料室」に、四切写真にして由良守応コーナーに展示している。

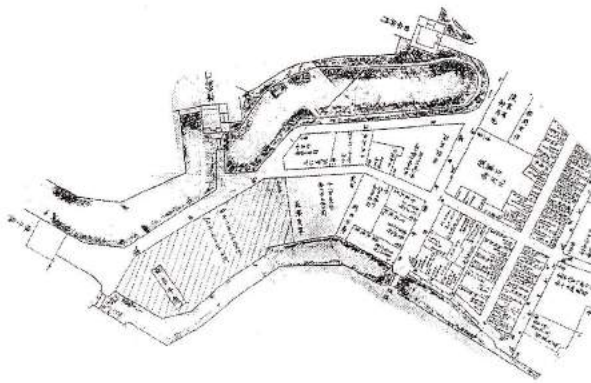
そこにたった一枚、二階建て乗合馬車の錦絵があるので掲載させて貰った。右隅に東京名所の図とあり、京町通油町緑橋の圖である。それぞれ、「千里軒」の文字が書かれている。乗合馬車は珍しかった様である。



①



②



東京皇居付近屋敷地図 由良守応邸
(中央左端)

十一、守応の東京の屋敷

明治八年に大邸宅を購入する。(明治十一年八月陸奥宗光が寄留していた) 東京飯田町一丁目一番地(皇居前・清水御門前)の一等地に四千二百九十壹坪という大宅地である。また、金千五百六十五円とある。少し離れた木戸孝允の屋敷が二千二十四坪であるのと比べるとその財力にびっくりする。ここで、御坊近辺の若者を書生として住まわせたり、在京の若者の援助をしたりしている。

十二、菊池海荘との係わり

守応は湯浅町栖原の菊池海荘に非常な恩恵をうけており、剣道の修行も菊池家でした模様であり、漢詩もこの頃に習ったものであろう。千葉十太郎(重太郎)から免許皆伝を受けたのも江戸ではなく、この地であると思われる。

①菊池海荘とはどんな人物か。

『和歌山県史 人物』が詳しく掲載しているので、幕末の有田の状況も分かるので、再掲させて頂く。

菊池海荘 きくちかいそう

1799～1881 幕末 保定・土固・孫輔・溪琴

砂糖問屋河内屋孫左衛門垣内(菊池) 淡齋次男として栖原(現湯浅町)に生まれる。兄玄蔵が本家の干鯛問屋栖原屋太郎兵衛家を継いだため海荘が江戸の河内屋を相続。江戸店は支配方が運営していたので海荘は栖原に在住する。幼いころから漢詩を学び詩人としても名をなした。大坂・京都・江戸を往来する機会も多く佐藤一斎・頼山陽・渡辺崋山・藤田東湖らとも交遊をもったという。後半生は農民の立場に立った海防論者として活躍した。天保年間には栖原で私財を投じて救民の土木事業を行ったため江戸店の身上が急激している。砂糖問屋の経営が思わしくなく救済事業ができなくなった安政六年(一八五九)には、百姓への説諭書をしたためている。

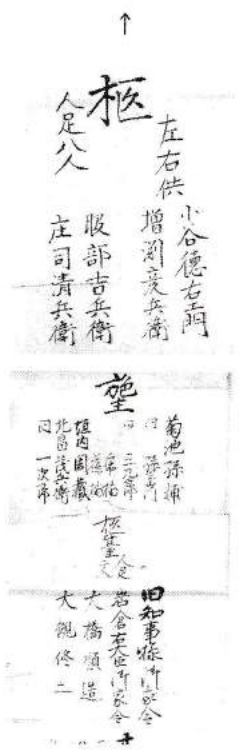
また、文政三年(一八〇六)には江戸の剣客倉田七郎を招き農民の士気高揚のため武術習練を行い、天保十年(一八三九)には野田昌助、安政四年には千葉周作を招いている。異国船の往来が激しくなる嘉永三年(一八五〇)「海防余論」を建白、同年には有田郡文武総裁に任じられる。

以後「海曲虫語」「海備余言」「七実芻言」「農兵論言」などの海防策を中心とした建白書・教諭書を書き上げ、有田の農兵を組織し大砲鑄造や道場運営を精力的に行なっている。倒幕戦の時期になると海荘は農兵の中立を主張、農兵は海防のためのものであつて国内戦が目的ではないという考えからだつた。

明治二年(一八六九)二月には有田郡民政副知局事に任命されるが高齢のため八月に辞任。十二年一家をあげて東京に移住。十四年一月十六日没。(『湯浅町誌』、遊佐教寛「農兵戦わず」)

②守応、菊池海荘の葬儀の行列の先導役を務める。

守応は受けた恩義は忘れず、明治十四年一月十六日、に八十三歳で亡くなった海荘の葬儀の行列の先導役(先供)を清麿と親子で務めている。行列は約五百人余で、旧知事御家令、岩倉具視御家令も載っている。東京谷中の天王寺の墓地へ向う行列の抜粋である。



守応が初めて海荘に会ったのは、海荘が由良灣の埋め立てをしていた所、安政元年の大津波で流され、それを速やかに知らせに行つた守応の態度が、気に入られた事からというが、すでに、嘉永三年頃には海荘宅へ行つていると思われる。北辰一刀流の免許皆伝は、安政四年の事である。

十三、陸奥宗光との交流

守応は、後藤象次郎、伊藤博文、陸奥宗光、津田出と交流を深めたが、特に紀州出身同志であったためか、陸奥宗光とは特に親しくしている。

① 陸奥宗光書翰
和歌山市立博物館の図録『陸奥宗光 その光と影』に、明治初年と思われる書翰が載せられている。

由良源太郎様 陸奥陽之介
御直披用事

頃日は無音なり如何御起居候哉 扱者過日粗御頼申たる一件ちういち、横浜二御座候哉承り度候、小生家も此比は築地中通り元松平金次郎邸二而、伊藤俊介ト同居いたし居候間、何卒御都合振承知いたし度候へば一札申入候也
六月十一日

② 岡崎冬彦著『陸奥宗光 上』（PHP研究所）では、明治十年西南の役に乗じて藩閥政治の打倒を画策した林有蔵、大江卓ら立志社のメンバー計画に加担したとして逮捕された時の事として『小伝』に次ぎの文章が載っている。

明治十一年八月二十一日除族の上禁獄
此一事は余が半生の一大厄難にして自家の歴史上磨滅すべからざるの汚点なり。余は多言するを欲せず、左の宣言文を一閱すれば其事自ら明瞭なるべし。

申渡書

和歌山県紀伊国海士郡小松原一丁目一番地
久野宗瀨方同居 当時東京都飯田町一丁目
一番地 由良守応方寄留

和歌山県土族

陸奥宗光

其方儀、明治十年、鹿児島県賊暴拳の時に際し、元老院幹事の職を持って（以下略）

と言う事で禁獄五年を言い渡され、山形監獄へ送られる事になる。この時の住所が由良守応の家である。

さらに、山形監獄へ送られた陸奥宗光に対して、明治十一年九月から、翌十二年十一月まで「陸奥宗光親戚惣代」の肩書きで、同地の旅館主後藤又兵衛と、食事その他日用品の差し入れなどをして、宗光に獄中の不自由をさせなかったという。

明治十一年九月十一日付けの「後藤又兵衛約定書 由良守応宛」が国立国会図書館に保管されているという。

大路和子著の小説『相思空しく―陸奥宗光の妻亮子』に、守応のことも詳しく出て来る。

特に、山形監獄での事では、山形県令三島通庸が薩摩閥で仲が悪かった事から、宗光の身を守るために頑張った事、宮城監獄での配慮の事までも書かれている。

十四、由良守応の掲載された図書・図録・雑誌等

① 『くすの木』 島真彦著 昭和五十一年十月十日発行。B 5判63頁。系図と由良守応小伝掲載。

② 『紀州郷土芸術家小傳（全）』 貴志康親著。（株）国書刊行会発行。昭和五十年三月五日発行。B 5判。続編「詩」の部48頁に「由良義溪」として、二段組の一段余り掲載。

③ 『紀の国一〇〇人』 朝日新聞社発行。昭和四十四年五月発行。B 5判309頁。由良守応は3頁に掲載。

④ 『歴史百科1979陽春第4号郷土人物事典』

（昭和五十四年） 新人物往来社発行。A 5判404頁。

● 『和歌山県●郷土の人物八四人』 2頁で守応は5行に掲載。

⑤ 『紀州今昔 和歌山県の歴史と民俗』 田中敬忠著 昭和五十四年三月発行。帯伊書店。B 5判521頁。守応は2頁に亘って掲載。

⑥ 『紀州史散策 きのくにの風景上巻』 神坂次郎著。有馬書店発行。昭和五十四年九月八日発行。B 6判27頁中、守応は5頁に亘って掲載。

⑦ 『郷土歴史人物事典 和歌山』 坂上義和著。第一法規出版株式会社発行。昭和五十四年十月五日発行。B 6判229頁。守応は1頁中12行に掲載。

⑧ 『陸奥宗光上』 岡崎久彦著。PHP研究所発行。

1988年(昭和六十三年) 11月第六刷発行。A5判
369頁。守応は随所に。

⑨『走れ乗合馬車』由良守応の生涯』神坂次郎著。朝
日新聞社発行。一九八九年(平成元年) 三月一日発行。
A5判301頁。

⑩『続日高郡誌 下巻』日高郡町村会発行。昭和五十
年三月三十一日発行。A5判1407頁。守応は2頁余
に亘って掲載。

⑪『和歌山県史 人物』和歌山県発行。大日本印刷
(株)。平成元年三月発行。A5判539頁+64頁。守
応は30行に亘って掲載。

⑫89夏季企画展『和歌山の明治維新—和歌山市の誕
生まで—』(図録) 和歌山市立博物館編集。和歌山市教
育委員会発行。平成元年七月発行。B5判16頁。
守応の書と二階建て乗合馬車の錦絵を掲載。

⑬『由良町誌 通史編下巻』由良町発行。(株)ぎよ
うせい印刷。平成三年十一月発行。A5判1181頁。
守応は2頁に亘って掲載。

⑭『和歌山の先人たち』和歌山県発行。和歌山県民
生部青少年婦人課編集。平成三年十一月発行。A5判
242頁。守応は8頁に亘って掲載。

⑮『和歌山日本1物語』和歌山放送発行。1998
年(平成十年) 四月発行。A5判195頁。「紀州人物

事典」として50人中、由良守応は7行に掲載。

⑯『相思空しく—陸奥宗光の妻亮子』大路和子著。
新人物往来社。2006年(平成十八年) 12月発行。B
6判426頁。守応は随所に。

⑰『わかやま何でも帳』(和歌山県教育委員会編)。
和歌山放送発行。平成25年2月1日第2版発行。
A4判95頁。守応は写真付きで11行に掲載。

⑱『CG日本史シリーズ22明治と文明開化』(株)
双葉社発行。A4判50頁。2009年(平成二十一年)
11月22日発行。乗合馬車の錦絵は12、13頁に。

⑲『97年秋季特別展 陸奥宗光 その光と影』(没後
一〇〇周年記念) 和歌山市立博物館編集。和歌山市教育
委員会発行。平成九年十月二十五日発行。A4判92頁。
26頁、27頁に千里軒の錦絵5枚が、28頁に写真守応と宗
光からの手紙。80頁にその解説が掲載されている。

⑳『由良町町政要覧 潮風の詩』。平成13年1月発
行。和歌山県由良町発行。A4判32頁。由良守応物語は
写真を含めて1頁分掲載。

㉑『すこやか2010春号 VOL・93』社会医療法人
黎明会 北出病院発行。A4判16頁。「ふるさと紀行史跡訪
問 由良守応 近代日本の夜明けに紀州人のたくましい工
ネルギーを発揮した男」として2頁に亘って掲載。

㉒『談覇』菊池晚香著。第十一 使馬如手(由良義

溪傳)」に3頁余に亘って掲載。B5判。

②『陸奥宗光 ■人と思想193』安岡昭男著。清水書院発行。2012年(平成二十四年)八月発行。新書判226頁。(山形監獄の陸奥)に少し掲載。

由良町の文化財 由良町教育委員会発行 B5判

①第十二号(昭和六十年三月発行)

「陸上交通の先駆者由良守応」大野治著。8頁。

②第十五号(昭和六十三年三月発行)

「由良守応と留守居(日誌)」小出潔著。16頁。

③第十七号(平成二年三月発行)

「幕末から明治維新までの由良守応」小出潔著。11頁。

④第二十号(平成五年三月発行)

「由良守応の墨跡」小出潔著。12頁。

⑤第二十五号「指定文化財特集」(平成十年三月発行)

守応は、1頁に写真五枚掲載。

⑥第二十八号(平成十三年三月発行)

「特命全權大使・米欧回覧と由良守応」小出潔著。7頁。

⑦第四十一号(平成二十六年三月発行)

「由良町内の碑文」大野治著。(由良守応翁顕彰碑)

を1頁掲載。

⑧第四十二号(平成二十七年三月発行)

「町内の文化財説明板―説明板に見る史跡の町―」

大野治著。20頁。(由良守応の墓) (由良守応生誕地)の写真が各半頁に掲載。

⑨第四十三号(平成二十八年三月発行)

「日本史の中の由良町―日本の歴史に関わる由良町の重大事件」大野治著。24頁。(由良守応オムンボスを走らせる)を、2頁半掲載。

◇紀の国先人展(パネル)

平成十八年二月に、和歌山県文化国際課(現・文化学術課)が、県立図書館2階の文化情報センターで「紀の国先人展」(紀の国が生んだ社会・経済の先人たちが開催され、事業家として由良守応が二十人の中に入って展示された。その時のパネル写真が次の写真である。

パネルはW500×H800で、パネルの下に陳列が置かれ、錦絵が展示された様である。

パネルは守応の写真と顕彰碑、誕生地碑の写真も入っている。この資料は、小出潔氏が保管していた資料に入っていたので、利用させて頂いたものです。



十五、由良守応正伝

守応については、各種の図書に掲載されているが、『由良町誌通史編下巻』の（人物編）か、『由良町町政要覧―潮風の詩―』が誤りなく、まとまっている。

『由良町町政要覧』の方が後で出来て、文章が柔らかいので、これを再掲したいと思う。

16頁

其の二

由良守応物語

由良守応は、時代の先駆者として我が国の政治や産業に功績を残した人物です。文政十年（一八二七）門前村に由良弥三兵衛の子として生まれ、始めは弥太次と呼ばれ、のち源太郎と改め、また守応と称しました。勤皇詩人である菊池海莊に見込まれ武術と漢学を学びました

が、その上達も早く、千葉重太郎から北辰一刀流の免許皆伝を受けています。特に馬術に優れていたようです。

紀州藩によって日高郡を追放された守応は、京都に上って庭田三位に仕えます。激動する維新前夜の中で、慶応元年（一八六五）から同三年まで（一八六七）にかけては田辺に幽閉されました。

しかし守応は各藩の俊秀と交遊して時世を論じ、己を啓発するとともに、国家の情勢を海莊に連絡し、後藤象二郎、伊藤博文、陸奥宗光と交流を深めました。

時代が変わって明治新政府が樹立した時、守応は大坂府勤農課に入り、かたわら借馬店を開業し、次いで内務省勤農局に転任しました。明治四年、岩倉具視以下一五〇名が欧米に派遣された際、畜産に通じた守応は一行に加えられ、明治六年に帰朝すると、直ちに皇宮馬車掛長の職に就きました。しかし、お召しの馬車が転覆するという事件があり、その責任をとって辞職しています。

明治七年（一八七四）に、守応は東京浅草―新橋間の乗合馬車会社を開業し、本社を「千里軒」と称しました。数十台の馬車で定期的に発着、往復して旅客を運んだこの試みは、我が国ではじめてのことで東京市民はおおいに喜びました。

また、守応は海外視察旅行での新知識に基づいて米国から数十頭の乳牛を導入して牧場を経営したり、発動機

製造会社社長となったり、隠居中に用水路や道路の工事を施工したりと、常に新しく人のためになる試みが続けていました。そんな守応の生きる姿勢から、私達は今もなお多くのことを学ぶ事が出来ます。

※補足

文政十年（一八二七）十二月二十五日生れ

明治二十七年（一八九四）三月三十日、六十七歳で逝去

年表については、様式が違うので、最終に、付記として掲載しました。

十六、あとがき

由良守応の総まとめをするに当たって、小生の残したいのは、後の人が知りたい事、調べたい事の糸口となる事であり、出来るだけ写真・図などを載せて目で見て分かるものになりたいと思い、再調査をしました。

この冊子を読まれて、読み間違いがあると思われる場合でも、簡単に調査に行ける様にしたい。

そのため、どこに何があるか、どんな所に手洗石や石灯籠、墓、説明板があるかなど、調査したすべてを掲載しておきたいと思った次第です。

いつもの駄文で申し訳ない思いでいっぱいですが、これが小生の精一杯の力です。

この論文を書くにあたり、小出潔氏と故中西捷美先生

の発表分を利用して頂いたので、感謝するとともに、三人の合同論文と思っています。

なお「岩倉使節団」のメンバーに由良守応が載っている図書の調査では、和歌山県立文書館の藤隆宏氏にお世話になりました、厚く御礼申し上げます。しかし、随員として行っていないながら「使節団」の名簿には載っていません。追加された十人程は載っていないのです。

また小生撮影以外の写真ですが、『CG日本史シリーズ22 明治と文明開化』の錦絵については、東京都小平市の「GAS MUSEUM がす資料室」の転載許可を頂きました。厚く御礼申し上げます。

和歌山市立博物館の写真については、由良町中央公民館がお断りして撮影させて頂いたものを、今回、許可を頂き、再掲させて頂きました。誌上をもってお礼を申し上げます。

◇その他の参考文献

『詳解伊郷土文献拾遺』井上豊太郎著。起雲閣発行。

『日本の歴史』中央公論社。

『明治ニユース事典』毎日コミュニケーション発行。

『講談社現代新書 岩倉使節団』田中彰著。（株）講談社

発行。（昭和五十三年三月第二刷）

『日本史総覧』その他

付記
年表

年号	西暦	記 事
文政10年	1827	門前村庄屋（由良町門前）由良弥三兵衛長男として生れる。はじめ弥太次、のち源太郎、長じて、守心 号は義溪。
天保8年	1837	大飢饉、十一月中旬より菊池海荘、救民対策と理財のため、由良湾内の中州の埋立を行う。工事普請役として、父弥三兵衛、現場責任者の任をはたす。
嘉永3年	1850	窮状を救われた網代浦では、翌年三月三日【由良大明神】の小社を祀り、弥三兵衛に謝す。海荘、紀州藩主に海防建議を上書し、有田・日高文武総裁となる。有田を中心に砲台の築造と共に、青壮年有志の武芸訓練に取り組み、各地に組織や稽古場が作られる。
嘉永6年	1853	六月 ペリー来航、開港を求めて去る。
嘉永7年	1854	六月 紀州藩は海岸警固の通達を出す。代官は大庄屋に地士・帯刀人との連携を指示。この時の志賀組地士帯刀人の中にはじめて由良弥太次が登場する。26歳。 九月・十月有田郡石垣組の道場で剣術稽古（『金屋町誌』） （十一月十七日・安政元年に改元）正月 ペリー再来航。
安政4年	1857	七月 堺、大和側川原での西洋式大砲の試射演習に、海荘に連れら参加。 九月 ロシア鑑テアナ号紀州沖を通り、沿岸大騒動、弥太次も由良・阿戸村詰で警備。 十一月五日 大地震・大津浪で由良湾内大被害。 千葉十太郎、有田郡再訪、北辰一刀流の免許皆伝。

安政5年	1858	五月 武芸出精表彰者の中に、由良弥太次、溪五郎あり。
安政6年	1859	七月 33歳 他出中留の地主、由良弥太次は「御城下より、十里の外、及び日高郡追放」を申し付けらる。大坂へ出かけた途中、同郷の同和地区住民が、木津、灘屋の平養子（身分をかくして）となつているのに会い、そのことを灘屋に言うべきなのに見過ごし、青年の頼みのまま書状を書き、金品を出さした。
文久2年	1862	六月十一日 長男清丸（源太郎と改名）生、妻は有田郡広村のタキ（民・民子となる）
文久3年	1863	正月 この頃 海荘の指示か、大坂、京都の間をあわたたくしく往復。
文久4年	1864	三月八日 庭田中納言（重胤）が天皇の勅使として石清水八幡宮に参拝したが、近習としてお供。――監察使東園中将（基敬）の一員として、加太浦の台場に来る。紀州藩に攘夷実行要請。
慶応元年	1865	（二月八日 元治元年）十一月十八日 切米8石、3人扶持。御徒歩に取り立てられる。 「実に以つて有難迷惑」と述べている。
慶応3年	1867	一月 京都の様子を知るため上洛。京都御年寄役に藩政批判をもらす（当時、藩の実権は保守派が握り、尊攘派は排除） 二月十八日 捕縛、揚屋に幽閉し慶応三年まで田辺に幽閉される（伊達千広が嘉永六年に幽閉の部屋） 一月三日 幽閉解除、門前村で謹慎。 十一月二十七日 和歌山に津田出を訪う。（津田は同十九日 加判の列に） 十二月 藩の依頼で、再び京都の情勢を探りに行く。

年次	西暦	出来事
慶応4年	1868	一月三日〜六日 鳥羽伏見の戦い。敗兵紀州へ。 二月十四日 藩主茂承大坂へ。二十一日 上京、朝廷に恭順を示す。守心、一行に同行。 この頃、大坂（夷島運上所付近）で、貸馬業を始める。司農局の勤につく。 十一月 陸奥宗光の供をして上京（京都） 五月十二日 民部官御雇、牧牛馬御用掛、津田が開いた藩営の友ヶ島の牧場で輸入牛馬の育成酪農に従事。
明治2年	1869	民部省通商司権大佑（七月 民部省と大蔵省に合併） 大蔵省通商大佑（この頃は在東京）
明治3年	1870	八月大蔵省勤農寮助。 十月 宮内御用兼務、勤農助、正七位由良弥太次が岩倉遣外使節団の一員となる。
明治4年	1871	十一月十二日 横浜出港。
明治5年	1872	八月 父弥三兵衛死亡 75歳。 ※太陽暦採用。明治5年12月3日が明治6年1月1日となる。
明治6年	1873	五月下旬 守心、大久保利通らと一足早く帰国、帰郷。 七月下旬 家族あげて東京へ出発（老母、妻、息子、養女、下女三人、食客一人計九人） 守心は天野伊兵衛と馬を連れて出発（湯森久三郎の留守居「日誌」始まる） 八月十日 守心と改名届。 九月十三日 皇宮馬車掛長となる。 十一月七日 皇后、皇太后お召し馬車転覆事件―その責任をとって宮内省辞職。

明治7年	1874	この頃アメリカから数十頭の乳牛を購入、早稲田で牧場経営。銀座で牛乳を売る。 八月 二階建て乗合馬車会社を開業、浅草雷門〜新橋間、一日六往復、三十人乗り。 本社「千里軒」、しかし、九月九日、二階建は禁止（往來人へ怪我させ、家屋等毀損し、迷惑少なからず）
明治8年	1875	二月 東京雉子橋外に大邸宅購入。
明治9年	1876	三月 陸奥宗光邸で囲碁等の会あり、出席の議員、参議から墨書を貰い、留守居・湯森氏の古稀祝いに帰り、労をねぎらう。
明治10年	1877	八月 千里軒、宇都宮へ路線を伸ばす（日光参拝の商社、銀行人らに人気あり） 二月 乗客席改良、腰掛け、寝ころび自由の席、荷物用馬車も経営する。 西南の役（二月十五日〜九月二十四日）
明治11年	1878	五月 陸奥宗光が拳兵覚悟で自宅を売り払ったので、彼に家を貸し、近くの長屋に移る。 八月 これに同調した土佐立志社林有造など拳兵計画。宗光も関与。 この年、番頭三人同時に辞める。利用者は多く、営業は継続。
明治12年	1879	一月 宗光（逮捕を前に大阪・紀州へ）由良、門前の守応宅に。二十一日あしか打ち。 八月 宗光35歳、除族の上、禁獄五年の刑、山形監獄へ。 九月 宗光在獄中の食事その他日用品の差し入れを、親戚代表として旅館主と約束。 九月 「千里軒の営業人、社主の搾取に不平」の新聞記事あり。 四月十八日、十一月十一日 留守居・湯森氏上京。 十二月 宗光、仙台の宮城県監獄に移る。同監獄の水野警部らを招いて供応。

明治13年	1880	<p>「その技芸（粹人ぶり）驚くばかりなり」と警部の日誌にある。</p> <p>年末、乗り合い馬車の売却を考えたようであるが、「木造馬車の計画」をもらしている。</p> <p>何か新しい馬車を考えたようであるが。</p> <p>三月頃 千里軒を手塚屋（宇都宮の旅館主）に売る。</p> <p>（「日誌」に出て来る日高地方出身者</p> <p>慶応義塾入塾者 中川吉次郎（御坊市）、久保田三郎（御坊市）、野田十一郎（日高町）</p> <p>外に、木下友三郎（御坊市）、古田房吉（御坊市）、山内季野（みなべ町）、湯川玄碩の</p> <p>弟文蔵（日高町）、還俗した長谷寺の僧・吉川一雅（由良町畑）等。</p> <p>六月 東京本材木町の別邸を売る。</p> <p>一月 陸奥宗光出獄する。（翌年より、英、豪州などに留学、十九年に帰国。外務省に入り、明治二十一年駐米大使、明治二十三年帰国）</p> <p>十月 和歌山県親睦会（東京築地須美屋 一八〇人余）挨拶する。</p> <p>七月 発動機製造会社、守応、社長となる。資本金二十万円、発動機関車（馬車台用）など製造予定。時期尚早、完成にいたらなかったと思われる</p> <p>二月 息子源太郎（清麿）25歳で死亡。十一月 その妻秀野21歳で死亡。</p> <p>（墓は明治21年、戸籍は20年）</p> <p>二月 この年、由良を通る県道の建設が始まる。</p> <p>三月十一日 由良県道の開通式（由良町阿戸から日高町池田へ抜ける道）</p> <p>トンネル【由良洞】の石板文字は守応の揮毫といわれる。</p>
明治14年	1881	
明治16年	1883	
明治19年	1886	
明治20年	1887	
明治22年	1889	

明治27年	明治26年	明治24年	明治23年
1894	1893	1891	1890
三月二〇日 和歌山市で死亡、67歳。(満66歳)	九月 妻タキ(民子)死亡。	九月 地元門前の「大峰山上講」の幟を書き、講員である。	六月 戸籍を大阪市東区南新町に、妻と共に分籍しているが、 七月 第一回衆議院選挙に宗光、和歌山一区より当選。 十一月 興国寺に「由良家歴世之墓」を建てる。 十月 浅草区福富町の守応に由良の岡氏寄留、渡米の話聞く。

申渡

他出留 日高郡門前村地士

由良弥太次

未三十三歳

其方儀大坂表へ罷越同所途中ニ而日高郡横浜村皮田

□兵衛と申奴ニ出逢候処同奴皮田之身分押包大坂木津

灘屋之平養子分ニ相成有之候段物語りいたし候付而は

取斗振も可有之処都而林兵衛之任頼書状等認遣灘屋親

類共初皮田と之儀顯ニ不申聞且林兵衛ニ灘屋名前ヲ以

通附ニ而紺布之類調させ已前貸銀之代リニ受取候始末

重々不屈千万ニ付御城下ノ拾里之外并日高郡追放申付

也 七月